

西洋の音楽 …

ピアノ協奏曲 第27番 変ロ長調 KV595

【作曲者】

モーツァルト (Wolfgang Amadeus Mozart, 1756－91 [オーストリア]) の時代, オペラとともに人気を博していたのが協奏曲で, コンサートの花形だった。モーツァルト自身も独奏をつとめ, 協奏曲を演奏することが多かった。

この協奏曲は最期の年, 1791年1月5日に完成。その年の9月頃から体調を崩して薬を服用, 11月から悪化, 12月5日に亡くなった。

【楽曲について】

最後のピアノ協奏曲であり, 自身で初演したコンサートが, 演奏家としてのモーツァルトの最後のステージとなった。27曲あるピアノ協奏曲の中でも演奏回数が多い。

とはいえ, ニ短調で書かれた第20番 (K.466) やハ短調の第24番 (K.491) のようなドラマティックあるいはデモーニッシュな音楽であるとか, 「戴冠式」と呼ばれる第26番 (K.537) のような華麗さなどは持ち合わず, 独奏者のヴィルトゥオジティを発揮させるものでもない。シンプルながら美しいメロディーに彩られ, そこに「晩年」を感じさせるのか, 数多くの名演奏が存在する。

3つの楽章からなり, アレグロ (変ロ長調), ラルゲット (変ホ長調), アレグロ (変ロ長調) で構成されている。モーツァルトの変ロ長調は, 崇高さを持ち合わせることが多く, ピアノ・ソナタ第13番, 歌劇『ドン・ジョヴァンニ』ドン・オッターヴィオのアリア, 歌劇『コシ・ファン・トゥッテ』フィオルディリージのアリア, 13管楽器のセレナード, など。

【鑑賞のポイント】

完成から9日後の1月14日には, 歌曲「春への憧れ K.596」が作曲された (教科書p.36)。協奏曲の第3楽章のメロディーと冒頭2小節が同じであり, 転用したとも言われる。楽譜を比べたり, 聴き比べたりするのもよいだろう。

(伊藤康英)

交響曲 第7番 イ長調 作品92

【作曲者】

ベートーヴェン (Ludwig van Beethoven, 1770－1827 [ドイツ]) は, 初期は, モーツァルト (1756－91) やハイドン (1732－1809) の影響が認められるが, 中期, 後期に至ると, 一見奔放とも見える形式や主題の展開などの素晴らしさなどにおいて, 古典派を集大成させたと言える。9曲残した交響曲も, 一曲一曲性格が異なる。

【楽曲について】

この第7番は, イ長調という明るい調性と, リズムの歯切れの良さが特徴的であり, 愛好されている。6/8拍子の第1楽章の快活なリズムと躍動的なメロディーは, テレビや映画などでも頻繁に用いられている。一方, 第2楽章はイ短調アレグレット。この作品の中で唯一暗さを感じさせるものである。第3楽章はスケルツォ。この位置にメヌエットではなくスケルツォが置かれるようになったのはベートーヴェン以降。第4楽章はアレグロ・コン・ブリオ。熱狂的なアレグロとなる。

【鑑賞のポイント】

変わったアプローチとして, この交響曲の管楽九重奏版も聴いてみよう。この時代, 大人数のオーケストラは, 一般市民がなかなか聴けるのではなく, 少人数での編曲で聴かれることが多く, さまざまな編曲が作曲者自身, あるいは他の編曲者によりつくられていた。たとえばF.リストはピアノ独奏編曲をつくっている。この第7番は, ベートーヴェン手ずから管楽編曲をつくっており, それは, オーケストラのものとはいささか趣を異にする。

よく知られた作品であるがゆえに, こうした鑑賞も生徒の興味を引くであろう (なお, この音源は比較的入手しやすい)。

(伊藤康英)

幻想交響曲 作品14a

【作曲者】

ベルリオーズ (Hector Berlioz, 1803－69 [フランス]) にとっては, 交響曲やオペラ, といったジャンルよりも「劇的」であることが重要だった。したがって, この「交響曲」には, 「ドラマ」が持ち込まれることとなった。ロマン的な幻想, 標題音楽の創始, 色彩的な管弦楽法, これがベルリオーズの特質といえる。

【楽曲について】

1830年初演。「ある芸術家の生活のエピソード」という副題をもち, それぞれ, 「夢と情熱」「舞踏会」「野の風景」「断頭台への行進」「ワルブルギスの夜の夢」と題された5楽章からなる。これは, 「病的な感性と想像力をもった若い音楽家が, 苦しい恋に絶望してアヘン自殺を図る。しかし致死量でなかったために死にきれず, 奇怪で幻想的な夢を見る。恋人は一つのメロディーとなって何度も現れ, 彼はついに夢の中で恋人を殺し, 悪魔の饗宴に身を置く」という標題に基づくもの。「若い音楽家」というのは, ベルリオーズ自身のことであり, 女優スミッソンへの失恋が作曲の契機となった (実際には, のちに2人は結婚している)。

愛する女性の旋律を〈固定楽想〉として一定の旋律を用い, 「標題音楽」という新しいジャンルを確立した作品。管弦楽法の上からも, ハープ2台, ティンパニの多用をはじめとして, 創意にあふれる色彩的な効果をもたらし, その後の作曲家に大きな影響を与えた。

【鑑賞のポイント】

この作品は, ベートーヴェンの交響曲第9番の, わずか3年後に書かれている。両者を聴き比べてみよう。 (伊藤康英)

第2楽章「舞踏会」



12の練習曲 作品10

【作曲者】

フランス人の父とポーランド人の母を親にワルシャワで生まれたショパン (Fryderyk Franciszek Chopin, 1810－49) は, 20歳で故郷を離れ, 以来二度と故郷に戻ることなくフランスで活躍し没した。ピアノ曲のキャラクター・ピース (性格的小品) を量産し, ノクターンやワルツなどは今日でも人気曲として定着している。また, ポロネーズやマズルカなどの民族音楽を起源にもつ作品や, バラードや前奏曲, スケルツォや練習曲といった既存の楽曲形態などを, 芸術性の高いピアノ音楽にまで高めた功績は大きい。

【楽曲について】

本来テクニックの習得と日々の訓練を目的とした練習曲は, 機械的な音型の繰り返しに重きが置かれ, 楽想的には面白味がないというのが一般的である。しかしショパンはテクニック以上に楽想的にも優れた芸術性の高い楽曲として練習曲を刷新している。この作品はショパンが19歳から22歳の間に書かれたもので, モシェレスやチェルニー, フンメルといった当時のピアノ演奏に卓越したピアニスト兼作曲家達の作品を参照しながら, ピアノ・テクニックの最先端の技術を駆使することと言うまでもなく, 抒情性豊かな旋律や, 繊細な楽想からドラマティックな楽想に至るまで多彩な表情を見せる楽曲12曲が並べられている。この中には「別れの曲」(ショパンの伝記映画のタイトルが起源) や「黒鍵」(黒鍵を多用することから), 「革命」(1831年のポーランドにおける11月蜂起でワルシャワがロシアに陥落された知らせに怒りの感情をぶつけた) などの愛称で呼ばれている有名な曲もある。

【鑑賞のポイント】

演奏者のテクニックだけでなく表現力にも耳を傾けてみよう。

それぞれの曲のイメージや特徴について感じたことを述べてみよう。 (齋藤弘美)